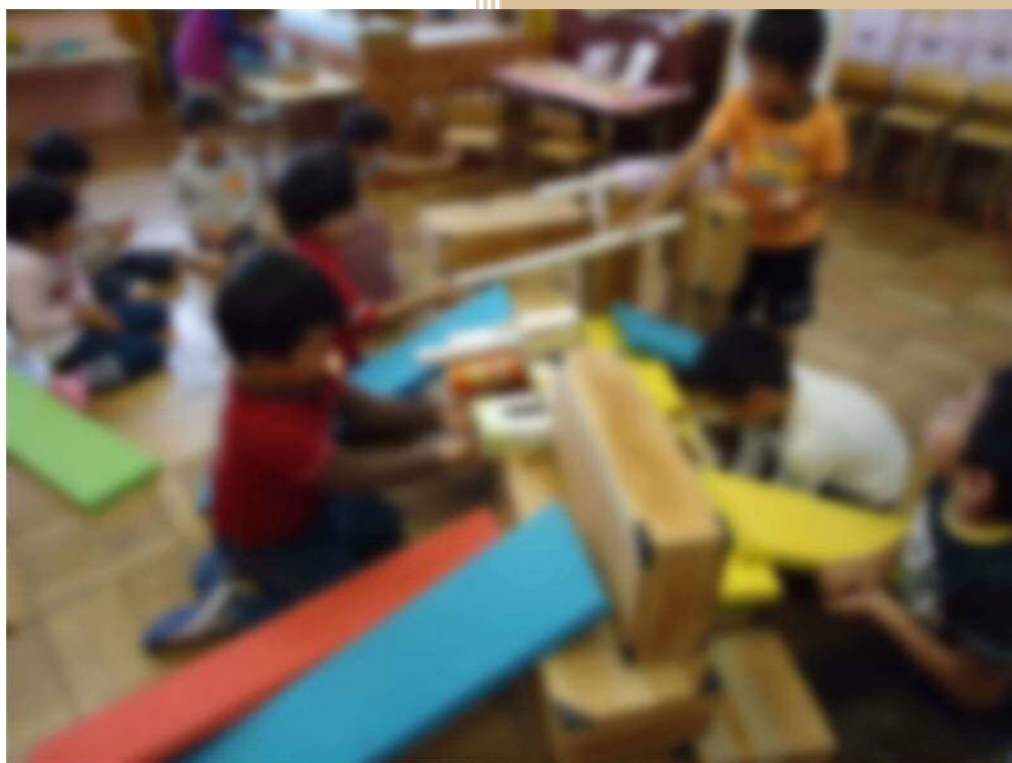


平成 28 年度幼児教育の推進体制構築事業

しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム

～接続期の子どもたちの育ちについて考える～



名 張 市

名張市教育委員会

平成 2 9 年 2 月

目次

◇ はじめに	… 2
◇ 名張市における幼児期の教育と小学校教育の連携の現状	… 3
◇ 幼児期に育みたい力	… 6
◇ 名張市における接続期のカリキュラム	… 10

引用・参考文献

関係機関一覧

編集関係者一覧

幼児教育の推進体制構築事業の概要

はじめに

本市では、これまで幼稚園・保育所（園）・認定こども園と小学校の連携を図り、円滑な接続を行うために小学校教員と幼児教育関係者が一同に会し相互の指導状況を交流することによって、就学前教育と小学校教育とをつなぐためのそごりかいを深めるとともに、個々の教職員の指導力向上を図ってきました。そんな中で、家庭の変容、保護者の共働き、待機児童の増加などから、本市の特徴的なこととして、一つの小学校に複数の幼稚園・保育所（園）・こども園から就学する子どもが数多く見られるようになり、こうした状況と相まって、いわゆる小1プロブレムの状況が多くの学校で見られるようになってきました。

幼稚園・保育所（園）・認定こども園では、一定集団としてのまとまりや、先を見据えた取組がなされていますが、小学校入学時に集団として再構成される際、なかなかスムーズに集団としてのスタートが切れていかない状況があり、授業中の離席・私語等で授業が成立しないという状況や集団不適應を起こす児童も現れるなどの状況が見られるようになってきています。

平成28年度より本市では、文部科学省の「幼児教育の推進体制構築事業」の研究委託を受け、「幼児教育の質の向上を図るために必要な推進体制に関する調査研究を行い、幼児期と児童期のスムーズな接続を実現させる。」ことを目的に、「幼児教育アドバイザー」配置及び接続期のカリキュラム作成に関する調査研究を始めました。小1プロブレムの状況がみられることを踏まえ、幼児教育アドバイザーが小学校・幼稚園・保育所（園）・認定こども園を巡回して、相互の職員への指導を行うことと、保・幼・小のなめらかな接続をめざして指導内容・指導方法を明確化するために「接続期カリキュラム」を作成するとともに研修の機会の充実を図る取組について検討してきました。

本冊子は、その軌跡をまとめるとともに今後の取組の指針とするために作成いたしました。

平成29年2月

名張市における幼児期の教育と

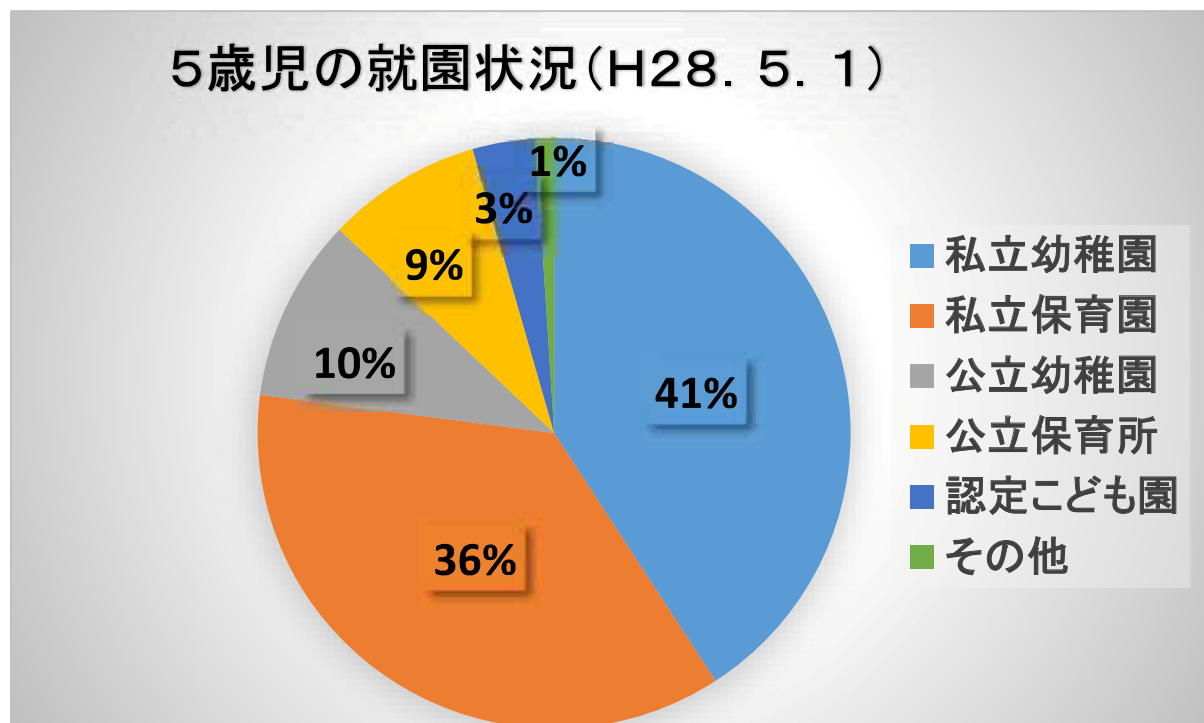
小学校教育の連携の現状

1 就学前教育・保育の現状

市内には、公立2幼稚園と私立4幼稚園、公立4保育所と私立9保育園、1認定こども園と地域型保育事業として6施設があります。

5歳児の児童数は、678名（平成28年5月現在）中、私立幼稚園285名（41%）、私立保育園223名（36%）、公立幼稚園70名（10%）、公立保育所59名（9%）、認定こども園23名（3%）、地域型保育施設7名（1%）となっています。

また、一つの小学校に多数の幼稚園・保育所から就学する状況があります。市内14小学校の1年生は、26学級（平成28年5月現在）ありますが、多いところで12施設より、少ないところでも5施設より、平均すると、1学級あたり7.4施設より就学していることとなります。このような状況は、就学に対して子どもたちに不安を与える一つの要因ともなっていると考えられます。

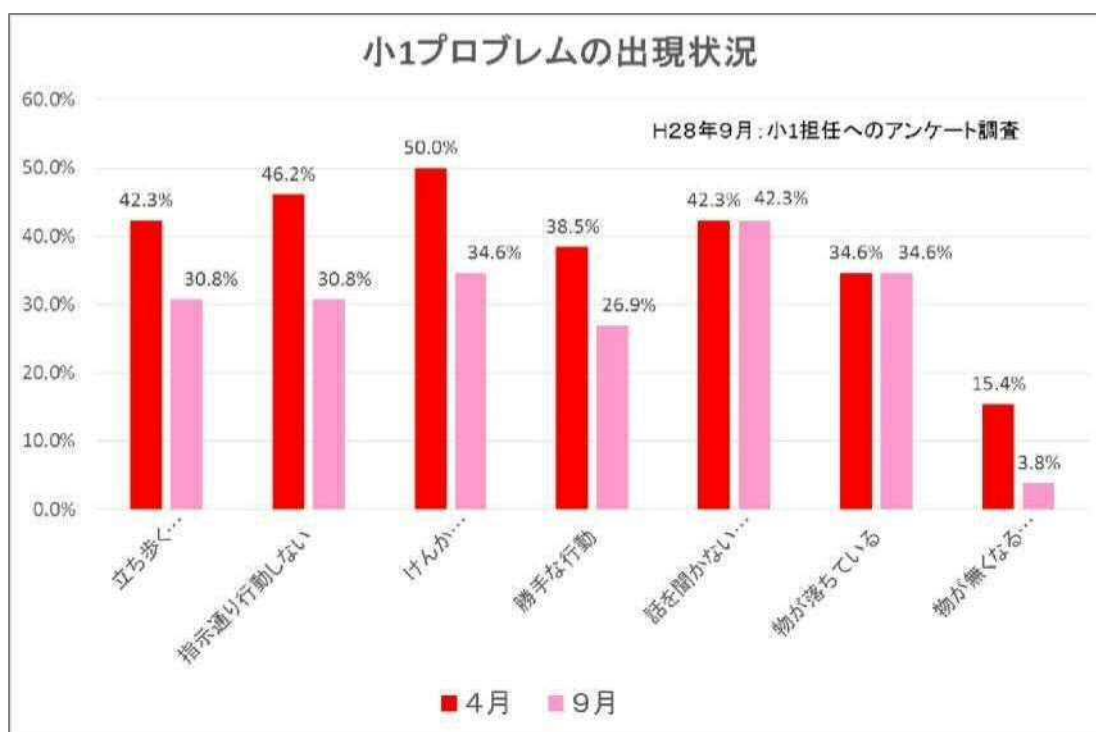


2 小1プロブレムの現状

「小1プロブレム」とは、1年生の学級において、入学後の落ち着かない状態がいつまでも解消されず、教師の話を聞かない、指示通りに行動しない、勝手に授業中に教室の中を立ち歩いたり教室から出て行ったりするなど、授業規律が成立しない状態へと拡大し、こうした状態が数ヶ月にわたって継続する状態をいいます。これらの状況について、小学校1年生の学級担任にアンケート調査を実施した結果は、下のグラフのとおりです。

アンケート項目は7項目。

- ① 授業中、勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外に出て行ったりする
- ② 先生の指示通りに行動しない
- ③ 児童同士のけんかやトラブルが日常的に起きている
- ④ 先生が教育的な配慮を要する児童の対応をしている間に、他の児童が勝手なことをしている
- ⑤ 授業中に担任の話を聞かない、または、私語がやまず、ざわざわしている
- ⑥ 教室内に物が落ちていたりして、教室が汚れている
- ⑦ 教室内で物が隠されたり、無くなったりすることがある



これらの状況が見られる児童の人数について4月当初と9月について状況を問うたところ、人数的にはのべ96名から55名に約半分に減少していますが、依然として①～④については約30%の学級で存在しており、⑤⑥については、4月と同じ状況が続いていることがわかります。

3 幼稚園・保育所（園）・認定こども園と小学校の連携の現状

（1）「移行シート」による連携

5歳児健診を実施している本市では、その結果を受けて、発達に課題のある子どもを、つなぐシステムづくりが構築されてきています。子ども発達支援センター職員が、健診結果についての説明が必要であると認められる場合、健診児の保護者に対して、面談の上、説明を行い、子育てに関する助言等必要な支援を行っています。さらに、就学後も引き続き支援が必要と判断されるものについては、就学に当たり、在園する保育所、幼稚園等の協力及び保護者の同意を得て、支援の移行シートを作成し、必要に応じ、判定結果その他の資料を添えて、学校教育室と協議した上、当該健診児が就学する小学校に引き継いでいます。

（2）保育士・幼稚園教諭と小学校教諭の訪問による連携

移行シートによる該当児童の支援等に係る連携の他に、入学までに就学元の幼稚園・保育所（園）・認定こども園等を小学校教諭が訪問し、児童の観察と支援についての情報共有を行っています。また、入学後は、保育所（園）・幼稚園の保育士・幼稚園教諭が学校を訪れ、授業参観の機会をもっている学校もあります。しかし、就学元が多数にわたることも理由で、この取組を行う学校は限られています。

（3）学校行事による連携

学校行事による連携については、すべての小学校で実施されています。運動会の「来入児旗取り競走」や、「1日体験入学」等、来入児が学校を訪れて、在校生とともに交流する機会を設け、入学への期待を膨らませ、不安を少なくする取組を実施しています。次年度入学をしたときに6年生となり1年生のお世話をすることになる現5年生が、来入児と手をつないで校庭を回ったり、いっしょにふれあう遊びをする中で交流を深めるよい機会となっています。

このように、入学までには様々な連携をとりながら、幼児期と児童期のスムーズな接続をめざしてきていますが、中には、「保育所ではちゃんとしていたのに、学校ではなじめず、そのギャップで保護者が学校に不信感を抱く」等のケースもあり、小学校1年生へ入学することで個々の新たな課題が見えてくることや、すべての児童の様子の引き継ぎがうまくいっていないこともあります。

また、小学校担任からは、「保育園でも1～3月に椅子座って45分間じっとしているという体験をしておいてほしい」など、就学前教育・保育の特性やめざす姿についての理解が不十分な回答結果もあり、就学前教育・保育の「見方・考え方」の十分な理解の上に立った連携が望まれます。

幼児期に育みたい力

1 環境を通して行う教育の意義

幼児期は自分の生活を離れて知識や技能を一方向的に教えられて身に付けていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる豊かな心情、物事に自分からかかわろうとする意欲や健全な生活を営むために必要な態度などが培われる時期であることが知られています。すなわち、この時期の教育においては、生活を通して幼児が周囲に存在するあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境にかかわることによって様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験が重視されなければなりません。

本来、人間の生活や発達、周囲の環境との相互関係によって行われるものであり、それを切り離して考えることはできません。特に、幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期で、この時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのようにかかわったかが将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味をもつこととなります。

したがって、幼児教育においては、学校教育法に規定された目的や目標が達成されるよう、幼児期の発達の特性を踏まえ、幼児の生活の実情に即した教育内容を明らかにして、それらが生活を通して幼児の中に育てられるように計画性をもった適切な教育が行われなければなりません。つまり、幼児教育においては、教育内容に基づいた計画的な環境をつくり出し、その環境にかかわって幼児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって幼児の発達を促すようにすること、すなわち「環境を通して行う教育」が基本となります。



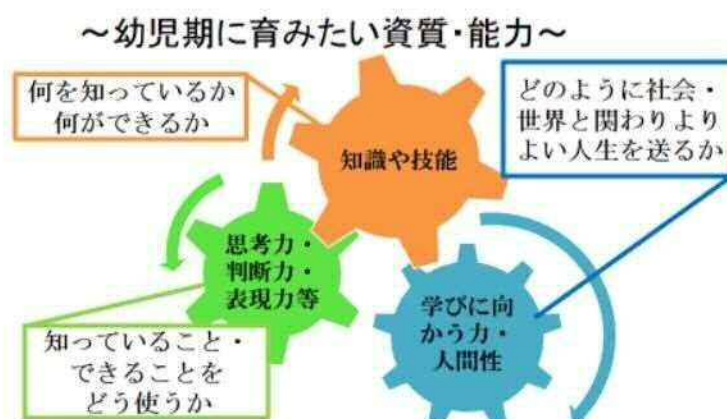
2 幼児に育みたい資質・能力

幼児教育においては、幼児期の特性から、この時期に育みたい資質・能力は、小学校以降のような、いわゆる教科学習で育むのではなく、幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むのです。このため、資質・能力の三つの柱を幼児教育の特質を踏まえ、より具体化すると、以下のように整理されます。

ア「知識・技能の基礎」（遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになるのか）

イ「思考力・判断力・表現力等の基礎」（遊びや生活の中で、気付いたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするか）

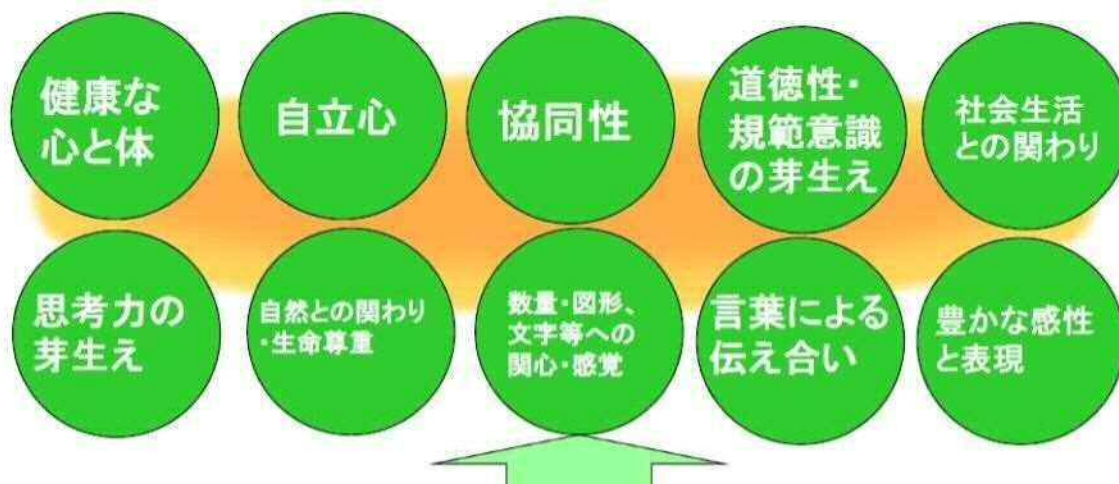
ウ「学びに向かう力・人間性等」（心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか）



幼児教育の特質から、幼児教育において育みたい資質・能力は、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、「知識・技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」を一体的に育てていくことが重要です。

3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

5領域の内容等を踏まえ、5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿を平成22年に取りまとめられた「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」を手掛かりに、資質・能力の三つの柱を踏まえつつ、明らかにしたものが、以下の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」です。



ア 健康な心と体 幼稚園生活の中で充実感や満足感を持って自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせながら取り組み、見通しを持って自ら健康で安全な生活を作り出していけるようになる。

イ 自立心 身近な環境に主体的に関わりいろいろな活動や遊びを生み出す中で、自分の力で行うために思い巡らしなどして、自分でしなければならないことを自覚して行い、諦めずにやり遂げることで満足感や達成感を味わいながら、自信を持って行動するようになる。

ウ 協同性 友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて、工夫したり、協力したりする充実感を味わいながらやり遂げるようになる。

エ 道徳性・規範意識の芽生え してよいことや悪いことが分かり、相手の立場に立って行動するようになり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、決まりを守る必要性が分かり、決まりを作ったり守ったりするようになる。

オ 社会生活との関わり 家族を大切にしようとする気持ちを持ちつつ、いろいろな人と関わりながら、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に一層の親しみを持つようになる。遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報を伝え合ったり、活用したり、情報に基づき判断しようとしていたりして、情報を取捨選択などして役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用したりなどして、社会とのつながりの意識等が芽生えるようになる。

カ 思考力の芽生え 身近な事象に積極的に関わり、物の性質や仕組み等を感じ取ったり気付いたりする中で、思い巡らし予想したり、工夫したりなど多様な関わりを楽しむようになるとともに、友達などの様々な考えに触れる中で、自ら判断しようとしたり考え直したりなどして、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

キ 自然との関わり・生命尊重 自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、身近な事象への関心が高まりつつ、好奇心や探究心を持って思い巡らし言葉などで表しながら、自然への愛情や畏敬の念を持つようになる。身近な動植物を命あるものとして心を動かし、親しみを持って接し、いたわり大切にする気持ちを持つようになる。

ク 数量・図形、文字等への関心・感覚 遊びや生活の中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりして、必要感からこれらを活用することを通して、数量・図形、文字等への関心・感覚が一層高まるようになる。

ケ 言葉による伝え合い 言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたことなどを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる。

コ 豊かな感性と表現 みずみずしい感性を基に、生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや思い巡らしたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲が高まるようになる。

この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域の内容等を踏まえ、特に5歳児の後半にねらいを達成するために、教員が指導し幼児が身に付けていくことが望まれるものを抽出し、具体的な姿として整理したものであり、それぞれの項目が個別に取り出されて指導されるものではありません。幼児教育は環境を通して行うものであり、とりわけ幼児の自発的な活動としての遊びを通して、これらの姿が育っていくことに



留意する必要があります。ですから、領域内容として新しいことを示したというよりは、5歳児の特に後半に育っていくところを重点的に取りだされたものです。さらに、それらがどの子どもにも十全に育つはずだとか、育つべきだと言っているのではなく、そちらに向けて伸びていく過程の姿を10の面に分けたものです。